

日本オーステイン協会第 11 回大会プログラム

-
- 日 時:2017(平成 29)年 6 月 24 日(土) 受付:10:30 より
 - 場 所:摂南大学寝屋川キャンパス 10 号館 3 階 プチ・テアトル
(大阪府寝屋川市池田中町 17-8)
※京阪本線「寝屋川市」駅南出口から京阪バスに乗りし「摂南大学」下車
JR 京都線「茨木」、阪急京都線「茨木市」駅から京阪バスに乗りし「摂南大学」下車
※大学ホームページ(<http://www.setsunan.ac.jp/access/>)ご参照のこと
 - 参加費: 日本オーステイン協会会員:無料
当日会員(上記会員以外):一般 1,000 円、学生 500 円(当日受付で支払い)
-
- ◆開会の辞(11:00~11:05) 塩谷 清人(日本オーステイン協会会長・学習院大学名誉教授)
 - ◆研究発表(11:05~12:25) 司会:水尾文子(龍谷大学准教授)
 - 研究発表 1 [11:05~11:45]
発表者: 広本 優佳(東京大学大学院人文社会系研究科修士課程 2 年)
「準男爵名簿の向こうに—「無名」の人間の歴史としての『説得』」
 - 研究発表 2 [11:45~12:25]
発表者: 杉本 久美子(東北女子大学准教授)
「オーステインとフォースター、そしてボウエンへ
—エリザベス・ボウエンの小説にみるオーステインの影響」
 - ◆総会(13:30~13:50)
 - ◆シンポジウム(14:00~16:15)
 - テーマ:「教室のジェイン・オーステイン」
 - 司会・講師: 高桑晴子(お茶の水女子大学准教授)
 - 講師: 寺西雅之(兵庫県立大学教授)
 - 講師: 原田範行(東京女子大学教授)
 - 講師: 鈴木実佳(静岡大学教授)
 - ◆特別講演(16:30~17:40)
 - 講師: 玉井 暲(武庫川女子大学教授)
 - タイトル: ジョン・ラスキンのピクチャレスク観から見る
オーステインのピクチャレスク風景
 - 司会: 川口能久(立命館大学特別任用教授)
 - ◆閉会の辞(17:40~17:45) 坂本 武(関西大学名誉教授)
 - ◆懇親会(18:00~20:00)
 - 場 所: 11 号館 最上階 スカイ・ラウンジ
 - 会 費: 5,000 円

問合せ先: 日本オーステイン協会事務局
〒790-8578 松山市文京町 4-2 松山大学新井研究室内
E-mail: harai@g.matsuyama-u.ac.jp

日本オーステイン協会第 11 回大会発表レジュメ

【研究発表】

準男爵名簿の向こうに―「無名」の人間の歴史としての『説得』

広本 優佳（東京大学大学院人文社会系研究科修士課程 2 年）

1816 年に『エマ』が出版される際に、皇太子への作品の献呈をめぐって、オーステインは皇太子の図書係であったジェイムズ・ステニエ・クラークと書簡のやり取りをする。歴史家でもあった彼は、オーステインに次作は歴史小説にすべきだと得々とアドバイスするのだが、彼女は歴史物を執筆するには自分があまりにも無知な女流作家であることを断った上で、クラークの提案を丁重に断るのである。

この手紙が交換される中執筆された最後の長編小説『説得』は、まさに一種の歴史である準男爵名簿が提示されることで幕を開ける物語である。そして本小説には幾度となく‘history’という単語が登場する。もちろんこの単語は当時「物語」の意味でも頻繁に使用されていたのだが、クラークとの書簡の内容を踏まえれば、この時期のオーステインが特に「歴史」に敏感であった可能性も簡単には無視できない。そもそもオーステインはそのキャリアのごく早い段階で伝統的な歴史の枠組みに反発した『イングランドの歴史』を執筆しており、その点では「歴史」とは何かという問題に極めて意識的な作家であった。

もっとも『説得』が「歴史的」であることそれ自体は決して新規性のある説ではない。この小説は実際の年号への言及がある作品であり、ナポレオン戦争という歴史的な「出来事」がプロットにも大きな影響をもたらしている。しかしオーステインの『イングランドの歴史』を読めば、「出来事」に固執する従来の歴史の有効性に関して彼女が疑問を抱いていたことは明らかである。この小品においてオーステインは「無知な」歴史家と自称しており、これはクラークの提案を断る際に彼女が取った態度ときれいに呼応する。このことを念頭に置くと、歴史的な事実を並べたててをせずになお彼女は『イングランドの歴史』を一つの歴史として意図していたと推測できる。

ギルバートとグーバーが述べたように、オーステインは男性の書いた「出来事」重視の歴史を唯一の現実とは認めなかった。というのもこれらの歴史はしばしば女性や無名の人間の生きた人生に関して沈黙を通してきたからである。戦争や政治的事件といった突発的な「出来事」は、歴史の大部分、つまり連綿と続いてきた日常生活の存在を陰らせてしまう。日常の歴史という概念を考えたときに、アナル学派の歴史学者フェルナン・ブローデルの議論を参考にするのは決して無益ではないだろう。ブローデルは従来の歴史が瞬間的な出来事のみを語ってきた一方で、長期的に反復されてきた名もない庶民の日常の生活や習慣が歴史の原動力となってきた事実を黙殺したことを批判している。

ブローデルが長期持続というタームを用いるときに主に意識するのは、習慣の反復が経済構造のような大きな枠組みに変動をもたらす様である。従って長期持続の概念を安易にオーステインの小説の日常性にあてはめることはためられるのだが、瞬間と持続という時間の二項対立そのものは『説得』を読み解く際の一つの手掛かりになりうる。『説得』ではウェントワースらの所属する海軍が繰り広げる戦闘について言及されるが、これらが瞬間的な出来事だとすれば、他方アンやエリザベスらが送る生活は均質で持続的な習慣の反復によって構成されている。

女性による歴史執筆それ自体の歴史を考えたときに、19 世紀になると女性歴史家たちは人間の習慣等に主眼を置く社会史へ関心を抱くようになるという。これを踏まえると、オーステインは女性の歴史執筆におけるそのような流れをいち早く予期した作家だと言えるかもしれない。というのも『説得』は日常の習慣的な生活そのものが「歴史」における現実の一つであることを示した作品だと言えるからである。今回の発表では、『説得』がナポレオン戦争のような具体的な歴史背景に依存せずとも、ある意味で「歴史的」であるということを示したい。

E. M. フォースター（1879-1970）はジェイン・オースティン（1775-1817）を愛好し、自らを“I am an Austenite.”と公言したほどである。その傾倒ぶりは単なる愛好の域を超え、彼の小説の構成、文体、テーマ、登場人物に影響を及ぼし、最終的には文学理論として『小説の諸相』（*Aspects of the Novel*, 1927）へと昇華した。そしてこのフォースターに影響を受けたのがエリザベス・ボウエン（1899-1973）である。ボウエンの初の長編小説『ホテル』（*The Hotel*, 1927）はイタリアのホテルを、続く『最後の九月』（*The Last September*, 1929）ではアイルランドのビッグ・ハウスを舞台としていることから、フォースターの『眺めのいい部屋』（1908）や『ハウズ・エンド』（*Howards End*, 1910）と比較されがちである。しかし、フォースターのこの2作品にはオースティンの『分別と多感』（*Sense and Sensibility*, 1811）、『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice*, 1813）、『マンズフィールド・パーク』（*Mansfield Park*, 1814）、『エマ』（*Emma*, 1815）などからの影響を多分に見て取ることができる。特に『ハウズ・エンド』でその傾向が強く、主人公マーガレット・シュレーゲルと妹のヘレンは『分別と多感』のエリナとメアリアンを彷彿とさせる。オースティンの作品で「多感」と「分別」として描かれた要素は、『ハウズ・エンド』ではシュレーゲル家とウィルコックス家が象徴する「詩」と「散文」の世界、教養と実業の世界として描写されている。またシュレーゲル姉妹が救済しようとするレナード・バストは『エマ』のハリエット・スミスの役割を担っている。

この『ハウズ・エンド』の後続版ともいえる作品がボウエンの『最後の九月』である。慣習の変化を良かれとしないアングロ・アイリッシュ・アセンダンシー（イングランド・プロテスタント系アイルランド人で地主階級の支配層）のネイラー夫妻、変化の必要性に気づきながらも変わろうとしないマルダ・ノートンやモンモランシー夫妻、最終的に変化へと踏み出す主人公のロイス・ファーカーやロレンス、世代に分けると三世代に分類できる男女の人間模様や、邸宅に象徴されるアイルランド文化の継承問題、登場人物たちを取り巻く社会情勢の切迫さなどは、『ハウズ・エンド』の最終章で描写された不確定な未来の、一つの末路であるといえる。このように、オースティンとフォースター、フォースターとボウエンの作品には強い相関関係を読み取ることができる。よって従来からの先行研究では、前者と後者の比較が主になされ、オースティンとボウエンの作品に関しては直接的な比較はほとんどなされてこなかった。

だがボウエンとオースティンとの関係はフォースター以上に深い。ボウエンはオースティン自身に関するものと自分にとってのオースティンというエッセイを2本、『高慢と偏見』の序文や『説得』（*Persuasion*, 1818）の書評、さらにはBBCのラジオ番組用にオースティンの作品を劇化するなどしている。このようなボウエンが初めてオースティンの作品を読んだのは彼女が22歳の時と少し遅く、10代の頃はむしろ読むことを避けていたとエッセイで告白している。そして初の長編小説『ホテル』の着想となったイタリアの湖畔滞在中にオースティンの『高慢と偏見』を読み、その読書経験からオースティンの現代性と長編小説を書く上での必須要素を学んだことも明かしている。このような事実から従来直接的に比較されることはなかったものの、ボウエンの作品にもフォースターと同様にオースティンとの強い関連性を読み取ることができるのではないかと推測した。ボウエン作品におけるオースティンの影響については、文学史ではフォースターやジョージ・エリオット、ヘンリー・ジェイムズらとともにオースティンの写実主義の伝統を受け継ぐ作家と記される程度である。事実、ボウエンの作風としてはアングロ・アイリッシュという社会的立場の不安定さから生じた作品のテーマ性やゴシック小説的要素の強さ、また作家になる前には一時画家を目指したという経緯から絵画的描写などが特徴としてあげられる。したがってオースティンとボウエンの小説では表層上の乖離がある。この乖離を減らす方法として、オースティンとフォースター、フォースターとボウエンの作品で相関関係の強いものの重複する要素を検証することで三作家に共通する要素を抽出し、ボウエンとオースティンの関係性を解く手がかりとする。そしてボウエンの小説におけるオースティンの直接的・間接的影響について考察してみたい。

【シンポジウム】

教室のジェイン・オースティン

司会・講師 高桑 晴子(お茶の水女子大学准教授)
講師 寺西 雅之(兵庫県立大学教授)
講師 原田 範行(東京女子大学教授)
講師 鈴木 実佳(静岡大学教授)

文学作品を大学で扱うことの意義を問い直す動きが英文学会でも改めて活発化している。英語の文学作品には、英語そのものの理解、文学作品としての鑑賞、異文化理解、批評理論への導入など様々なことが求められてきた。何にどのように焦点を当てて授業を組み立てるか——年々多様化する日本の大学の「教室」においてこの問いは古くて新しいものとなっているのではないか。本シンポジウムではオースティンに焦点を絞って、教室においてどのようなアプローチが可能か、そのことによってオースティンを若い世代に向かってどのように開いていくことができるかをフロアとともに考えていきたい。

英語学習教材としてのジェーン・オースティン ——*Sense and Sensibility*の複数のテキスト分析から

寺西 雅之

文学作品は、教養と英語のスキルを身につけるための恰好の教材である。その一方で、外国語として英語を学ぶ学習者にとっては、文学作品、特にオースティン等の古典文学を原作で味わうことはハードルが高く、近年では、翻訳や映画に加えて、Graded Readers(GR)と呼ばれる英語学習者向け多読教材やあらすじなどをまとめた補助教材の積極的利用を促す動きもある。本発表では、オースティンの作品の中から *Sense and Sensibility* (1811)を取り上げ、原作、GR、映画など複数のテキストを比較し、英語学習論的な観点より人物造形、技法、文体等について分析・考察を行う。

実作者オースティンの誘惑——文体、描写、へそ曲がり

原田 範行

「入念に囲われた、きれいなお庭」でしかないとも評されるオースティンだが、テキストを吟味してみると、実はほとんど野放しの庭が姿を見せることも少なくない。文体や描写の点で英文学史に大きな影響を与えたオースティンだが、彼女の、このへそ曲がりこそ、むしろその文学的個性の一つであり、彼女の執筆工房でのへそ曲がりぶりを教室で楽しんでみることはできないか、という提案を、*Northanger Abbey* (1818)や *Persuasion* (1818)、初期習作などを題材に検討してみたい。

*Pride and Prejudice*の罨——風俗小説とチック・リット

高桑 晴子

Pride and Prejudice (1813)の人気は根強い。エリザベスとダーシーの恋愛が高揚感を引き起こすからなのだが、それだけにこの小説にはある段階で学生の批判的な読みを停止させてしまうところがある。アダプテーションを合わせ鏡にすることで、憧れの恋愛の背後にあるものを問うことはできるだろうか。チック・リット *Bridget Jones's Diary* (1996)を利用することで見えてくる *Pride and Prejudice* を教室で扱うことの難しさを考えたい。

教えること・学ぶこと・展望

——‘that sanguine expectation of happiness which is happiness itself’

鈴木 実佳

オースティンを読むこと、学ぶことをめぐる個人的回想及び作品と歴史からの考察と、現在の取り組みの報告(2015年度 *Emma*、2016年度 *Sense and Sensibility*)、そして未来にむけての提案を試みる。それぞれ教室で教えた坪内逍遙の言う「熱誠」とラフカディオ・ハーンの「日本の娘のような本当にかわいらしい人物が描かれていること」をふまえて、日本の学生たちの共感を誘う点を考える。

【特別講演】

ジョン・ラスキンのピクチャレスク観から見るオースティンのピクチャレスク風景

玉井 障

ラスキンが、*Modern Painters* の第4巻（1856）において、ターナーのピクチャレスク風景について論じたとき、ピクチャレスクには ‘noble picturesque’ と ‘surface-picturesque’ の2種類があることを主張し、ターナーのピクチャレスクは ‘noble’ な性格のものであることを明らかにした。このラスキンのピクチャレスク観を踏まえてオースティンの小説に現われたピクチャレスク風景を検討したとき、どのような意味が見えてくるのだろうか。

『ノーサンガー・アビー』ではティルニー氏によるキャサリンに対するピクチャレスク美学についての講義、『分別と多感』ではエドワードを中心にエリナーとマリアンを交えた3人のピクチャレスク談義、『高慢と偏見』ではエリザベスの前に現われたペンバリー屋敷の佇まい、『エマ』ではドンウェル・アビーの屋敷などを取り上げて、ピクチャレスク風景をめぐって、オースティンとラスキンの間にどんな文学的架橋が可能なのか考えてみたい。

【交通アクセス】



【会場マップ】

